

幕末～明治期の稲作記録

河野家（山口市）文書の紹介

●河野家の稲作記録

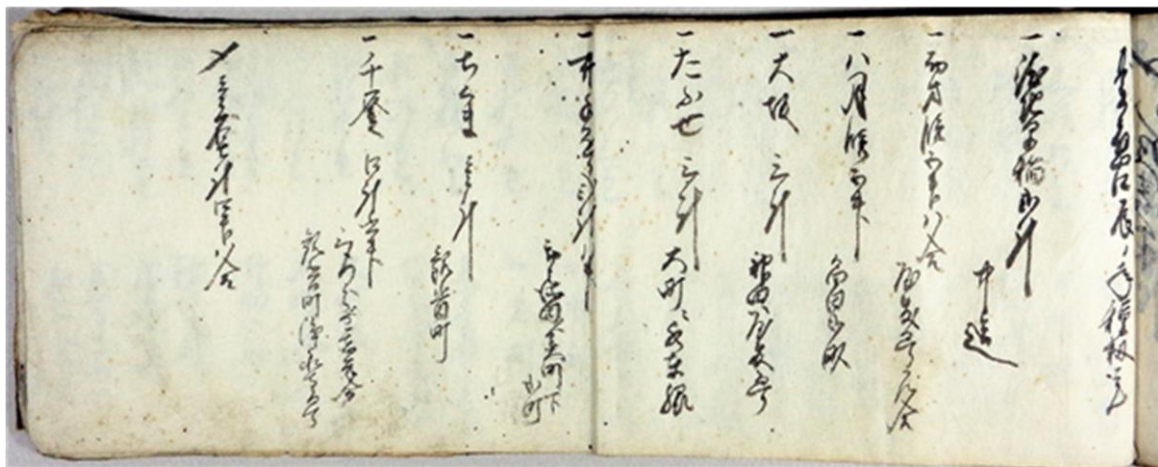
河野家は、江戸時代には山口古熊の畔頭を、明治前期には上宇野令村会議員を務めた家です。

今回は、同家の伝来文書のなかから、幕末～明治期の稲作に関する記録を紹介します。

●種粃

いい季節になりました。農家は、田植えの時期を迎えました。地域によっては、済ませた所もあるようです。

田に植える苗は、種粃を苗代で2、30センチに育てたものです。近年では、苗を購入して田植えをする農家も多くなっているそうです。



慶応四辰ノ年種粃覚	
一 徳地早稲式斗	中道
一 西方餅五升八合	屋敷廻り見合
一 八月餅五升	畠田式畝
一 大坂三斗	神田二屋敷廻り
一 たふせ三斗	大町二水車脇
一 井手懸り式斗八升	勘兵衛田方大町下
一 ちくま壹斗	観音町 式町
一 千登四斗六升	三右衛門分方甚吉分 観音町浄泉寺廻り
一 姥石七斗四升八合	

写真1 河野家の種粃 明治元年（1868）分

写真1は、慶応4年(1868、明治元年)に、河野家が植えた稲粃のリストです。この年、同家で用いた種粃は、「徳地早稲」・「大坂」・「たふせ」・「井手懸り」・「ちくま」・「千登」と、「西方」「八月」の2種類の餅米を合わせて8種類でした。各種粃の量と植えた場所を記しています。



一 徳地早稲	辰ノ秋	
一 三拾式わ		中道ノ七畝
同		
一 四拾四わ		同 大町
一 八月餅九わ		島田式畝
一 たふせ		
一 六拾わ		大町東
一 ちくま		
一 六拾壹わ		亀太郎分下

写真2 秋稲記 明治元年(1868)分

●年々秋作控帳

写真1・2は、「種粃記(其外)」(河野家97、嘉永5年(1852)～明治18年(1885))の一部です。

同型の資料として、「年々秋作控帳」2冊が伝わっています(河野家98・99、写真3・4)。それぞれ、明治19年(1886)～明治27年(1894)、明治33年(1900)～明治39年(1906)の記録で、種粃の品種・量・収穫などが記されています。また石灰の取引や加徴米に関する記録なども明治以降の経営の一端が知られる資料です。

●収穫

実りの秋を迎えると、稲の刈り取りを行います。河野家では、その年の収穫実績を記録として残しています。「秋稲記」「秋稲覚」などのタイトルで、田ごとにその品種と収穫量を記しています(写真2)。収穫量は、それぞれ「何把」という形で記され、年によって書き方が一定しませんが、品種ごとの俵数と総計の俵数を記す場合と、全収穫の俵数のみを記す場合もありました。

こうした稲作の詳細を記した記録には、なかなかお目にかかれません。藩や村に残る年貢関係連資料には、「米」としか書かれていないので、河野家の記録は、当時の稲作を知るうえで貴重な情報源といえます。

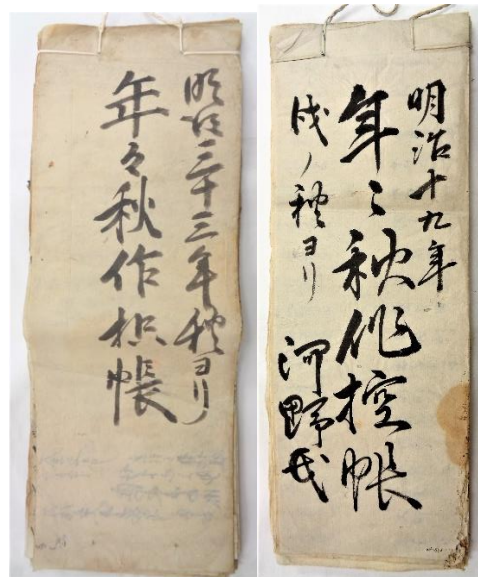


写真4

写真3

●種籾の変遷

別表は、展示中の3つの資料から河野家が作付けした稲の品種を書き出したものです。年代は、嘉永5年(1852)～明治27年(1894)と同33年(1900)～同39年(1906)。

これを見ると、毎年5～10種類の稲を植えていたことがわかります。正月に欠かせないからでしょうか、餅米については最低1種類の作付けをしていました(「餅」としか記されない年代は、そのまま「餅」と表に示しています)。

一覧表を見ていただくと、品種名には、「地名」を冠したものが多いことに気づかれるでしょう。県内の地名がついたと考えられる「萩流」「徳佐坊主」「徳地早稲」「中尾早稲」(山口市吉敷カ)「たふせ」(田布施カ)や、県外の地名がついた「新四国」「土佐川」「大作州」「備前」「大坂」「吉野早稲」「ちくま」(千曲、筑摩カ)などがあります。

それぞれ稲の特性や成り立ちについて詳細は明らかにできませんが、河野家では、各地域で優良品種として評判が立っている稲の種籾を何らかの方法で入手したのでしょうか。いろいろな品種を入手して試行錯誤を続けた河野家。そこには良質な米を少しでも多く収穫したいという思いが感じられます。

●「都」の登場

現代の品種改良は、人工交配によって行われています。そうした技術がなかった時代は、篤農家を中心に人々の不断の努力によっていました。同じ品種のなかでも、ちょっとした違いに着目して、新たな種を育成したようです。例えば、同じ稲穂でも元気が良く勢いがある稲穂だとか、少し大きめな稲穂であるとか、目視して特徴があると感じた稲穂を選抜して育てていきました。

河野家が、明治10年(1877)に初めて作付けした「都」という品種の来歴は右のとおりで、偶然の出会いから優良品種が創出されたのです。

河野家では、明治17年から「都」の作付けをいったんやめて「高津」(高津戻り)に替えたものの、同24年には再び作付けをしています。

「都」の発見
天保三年(一八三二)萩藩主参勤の従者二人が摂津国西宮(現兵庫県)付近で「稲穂ノ秀ツル」品種に気づいた。現地の人によると筑前(現福岡県)からもたらされた稲だという。二人は三穂ずつ持ち帰って植えたところ、在来の稲に「勝ルコト数等」で、その評判が広がり多くの人々が作付けするようになり、この稲を「都」と命名した。(明治二四年(一八九〇)山口県内務部第一課『山口県農事調査表』明治政府布達類399・官省公報類602)。

●「穀良都」

吉敷郡小鯖村(現山口市)の篤農家伊藤音市は、「都」から選抜して「穀良都(こくりょうみやこ)」という新たな品種を世に送り出しました。明治22年(1889)のことです。

この品種の特性について、大正11年(1922)の『山口県農事試験成績要覧』(山口県農事試験場刊)は、次のように記しています。

都ヨリ選出セル早熟無芒種ナリ、大体ノ特性ハ都ト畧ガ同様ニシテ、株張中等、

草丈長ク風害ニ弱ケレ共、早熟ノ大粒種トシテ収量多シ、米ハ中形大粒ニシテ心白アレドモ品質佳良ナリ、冷氣勝ちノ不順ナル年等ニ於テハ都ヨリ却テ好結果ヲ得ベシ（読点、筆者）

風には弱いものの、早熟、大粒、品質佳良と評価されており、穀良都は、明治から昭和初期にかけて西日本一帯から関東にかけて作付けされ、朝鮮半島でも作られました。開発者の伊藤音市は、このほかに「音撰」（明治18年、音市が選抜したという意）「光明錦」（同33年）など、いくつもの品種を世に送り出しています（『小鯖村史』1967年）。

河野家では、明治33年（1900）に伊藤が手がけた「国良」「光明錦」の作付けを行っています。「国良」は、「穀良」の当て字と考えてよいと思われます。

●農政と農民

明治期、「米」は重要な輸出品として取引されていました。山口県で生産された米は、いったん神戸へ移出され、そこから海外へ輸出されていました。海外では小粒種より大粒種の人気が高く、需要がありました。明治政府や山口県は、農家に対して大粒種の米の生産を奨励する農政を展開していました。

河野家でも作付けされた「神力（しんりき）」という品種には、小粒種で多収穫という特長がありました。国や県の方針とは真逆の存在で、市場においても価格が安かったようです。大粒種に比べて収量が多い「神力」は、市場で米を売却するほど余力のない、たとえば小作農家に好まれ、作付面積を拡大させていきました。

河野家は、小規模ながら地主経営も行っており、経済的に余力のある存在といえます。同家が市場で廉価だった「神力」の作付けを行った背景として、売却目的の大粒種と食料として期待した小粒種といった、経営のなかでバランスを取ったのかもしれませんが。

●「穀良都」の復活

平成9年（1997）、山口県農業試験場（現農林総合技術センター農業技術部）で、酒造好適米「山口酒1号」が産声をあげました。まぼろしの存在となっていた「穀良都」を母体として開発された新品種は、「西都の雫」の名前で流通しています。

全国各地でかつて作付けされた多くの品種は、都道府県の農業試験場などで、種籾のかたちで保存されています。現在、忘れられた存在となっている品種が、新たな品種として甦る可能性は、今後もありそうです。

表 河野家(山口市)における稲作品種の変遷

年代	稲の品種												品種数	
嘉永5(1852)	西方餅		白けた	新四国	大作州	萩流	日出山							6
嘉永6(1853)	西方餅		白けた		大作州	萩流	日出山							5
安政1(1854)	西方餅		白けた		大作州	萩流		家女						5
安政2(1855)	西方餅				大作州	萩流		家女	平介					5
安政3(1856)		ありま餅	源六		大作州	萩流		家女	平介	徳佐坊主				7
安政4(1857)		ありま餅			大作州	萩流		家女	平介	徳佐坊主				6
安政5(1858)	餅		神寄	ひびよし	大作州	萩流		家女	平介	徳佐坊主				8
安政6(1859)	餅		神寄	ひびよし	大作州	萩流		家女	平介	徳佐坊主	徳地早稲	井手がかり		10
万延1(1860)	餅		神寄	ひびよし	大作州					徳佐坊主	徳地早稲	井手がかり		7
文久1(1861)	餅		神寄	ひびよし	大作州				大坂	徳佐坊主	徳地早稲	井手がかり		8
文久2(1862)	餅		神寄		大作州	土佐川	千成り		大坂	徳佐坊主	徳地早稲	井手がかり		9
文久3(1863)	餅		神寄		大作州	土佐川	千成り		大坂		徳地早稲	井手がかり		8
元治1(1864)	餅		神寄			ちくま	千成り		大坂		徳地早稲	井手がかり		7
慶応1(1865)	餅	八月餅	神寄			ちくま	千成り		大坂	小柳	徳地早稲	井手がかり		9
慶応2(1866)	餅	八月餅	神寄			ちくま	千成り		大坂	小柳	徳地早稲	井手がかり		9
慶応3(1867)	西方餅	八月餅		たふせ		ちくま	千成り		大坂	小柳	徳地早稲	井手がかり		9
慶応4(1868)	西方餅	八月餅		たふせ		ちくま		千登	大坂		徳地早稲	井手がかり		8
明治2(1869)		八月餅		たふせ			けた	千登	大坂		徳地早稲			6
明治3(1870)	餅	八月餅	白けた	たふせ	金作	土佐川		千登		赤けた	徳地早稲			9
明治4(1871)	餅	八月餅	白けた		金作	土佐川		千登		赤けた	徳地早稲			8
明治5(1872)	餅	八月餅	白けた		金作	土佐川		千登		赤けた	徳地早稲			8
明治6(1873)	西方餅	八月餅	白けた			土佐川		千登		赤けた	吉野早稲	中尾早稲		8
明治7(1874)	餅	八月餅	白けた			土佐川		千登		赤けた		中尾早稲		7
明治8(1875)	西方餅	八月餅	白けた				小千登り	千登		赤けた		中尾早稲		7
明治9(1876)	西方餅	八月餅					小千登り			赤けた	豊年早稲	中尾早稲		6
明治10(1877)	西方餅			都			小千登り			赤けた		中尾早稲		5
明治11(1878)	西方餅			都	八わ					赤けた		中尾早稲		5
明治12(1879)	西方餅			都	八わ	千見折				赤けた		中尾早稲		6
明治13(1880)	西方餅			都	八わ					赤けた		中尾早稲		5
明治14(1881)	西方餅			都	八わ	備前						中尾早稲		5
明治15(1882)	西方餅			都	八わ	備前						中尾早稲		5
明治16(1883)	餅			都	八わ		惣五郎					中尾早稲		5
明治17(1884)	餅				八わ		惣五郎				高津戻り	中尾早稲		5
明治18(1885)	餅				八わ				白玉		高津戻り	中尾早稲		5
明治19(1886)	餅		坊主		八わ				白玉		高津戻り	中尾早稲		6
明治20(1887)	餅				八わ		惣五郎				高津戻り	中尾早稲		5
明治21(1888)	餅				八わ		惣五郎		口より	平井	高津戻り	中尾早稲		7
明治22(1889)		早餅	晩餅		八わ		惣五郎			小倉戻り	高津戻り	中尾早稲		7
明治23(1890)	餅				八わ		今都				高津戻り	中尾早稲		5
明治24(1891)	餅			都	八わ	式本講	今都				高津戻り	中尾早稲		7
明治25(1892)	餅			都	八わ	式本講	今都					中尾早稲		6
明治26(1893)	餅			都	八わ	式本講	小都	撰貫	新暦			中尾早稲		8
明治27(1894)	西方餅	清水餅		都	八わ	式本講	小都	撰貫	新暦			中尾早稲		9
明治33(1900)	西方餅	京餅		都		国良	光明錦			神力	改進黨			7
明治34(1901)	西方餅	京餅		都		国良	光明錦			神力	改進黨			7
明治35(1902)	西方餅	京餅		都		国良		金時		神力	改進黨			7
明治36(1903)	西方餅	京餅		都		国良		金時		神力	改進黨			7
明治37(1904)	西方餅	京餅				国良		金時		神力	改進黨	高津		7
明治38(1905)	西方餅	京餅				国良		金時		神力	改進黨	高津		7
明治39(1906)	西方餅	京餅	小鯖早稲餅			国良		金時		神力	改進黨	高津		8

【典拠】当館蔵 河野家(山口市)文書97「種籾記(其外)」(嘉永5年(1852)～明治18年(1885))、同98「年々秋作控帳」(河野家98、明治19年(1886)～明治27年(1894))、同99「年々秋作控帳」(河野家99、明治33年(1900)～明治39年(1906))。

(註) ①明治19年と明治33年は種籾記を欠くが、当該年の秋種記を参照した。②「餅」とのみ記載されている箇所は「西方餅」の可能性が高い。